［書　評］

ジャン・ラクチュール著『世紀の青春時代』

——ジャック・リビエールと NRF——

鈴 木 正 昭

本書は 1994 年 10 月にフランスの SEUIL から発表された．600 ページ近い大冊である．

今年（1995 年）はジャック・リビエールの死後 70 年にあたる．本書は彼の生涯をその誕生から著者が重要と考える様々な時期や事件，人物との出会いと影響関係等を検証しながらその死に至るまでたどるという方法を採用している．文学評論，研究書というよりは文学者の伝記というべき書物である．

著者のラクチュール氏は 1950 年代から数多くの著作を発表してきた評論家である．その主要な対象は政治に関わる分野であり，エジプト，モロッコ，ベトナム，アルジェリアといったフランスの植民地ないしは半植民地状態におかれたアジア，アフリカの国々の政治に関するものと，それらの国々と深い関わりを持った人物，たとえばド・ゴール，ホーチミン，ナセル，シャンポリオンらの伝記が中心となっている．

文学に関する著作としてはフランソワ・モーリヤック，アンドレ・マルローに関する評伝があるが，この分野は著者にとってはどちらかといえば手薄な分野であったことは否めない．ジャック・リビエールに関する今回の著作は，氏としては三冊目の文学者の評伝である．

ジャック・リビエールは言うまでもなく，今世紀の初頭アンドレ・ジイドを中心に若い文学者達による新しい文学の創造を目的に刊行された雑誌 NRF の編集の中心人物として敏腕ぶりをうたわれた人物であり，同時に永遠の青春文学と言われる『グラン・モーヌ』の著者アラン・フルニエの親友としてあまりにも有名である．そして彼らの間に交わされた多くの手紙は二巻の書簡集にまとめられ，今世紀初頭の文学芸術の状況を知るための必須の資料とされている．さらにアランの妹イザベルは本書の主人公の妻として兄や夫の死後もつい近年まで生存し両者についての多くの回想記を著した．

本書はまずジャックが青春時代をむかえた 20 世紀初頭のヨーロッパやフランスの政治的，社会的，文化的概観から始められている．ちなみに彼の生まれたのは西暦の 1886 年で日本式に言えば明治 18 年にあたる．

政治的には 20 世紀の初頭は列強がそれぞれ自らの進路について明確な見取り図を描くことのできない，羅針盤なしで霧の立ちこめた海を航海するような時代だった．ビスマルクに続いてグラッドストーン，クレマンソーといった時代を指導してきた人物達の多くは死ぬか，時代の表面から退いていた．そして次代の指導者はまだそれぞれ時代を動かすだけの地位に達してはいなかった．いわば偉大な指導者の大空位時代だった．そして十数年後に第一次世界大戦という，あのような大きな破局が待ちかまえていようとは当時は誰も予測だにできなかったのである．

著者によれば知的，美的な分野においても事情は似たようなものだった．「やがて飛行機の飛ぶことになる宇宙は言葉や，形，音，色が溶解して一つの漠然としたざわめきになるぼんやりした予言的な夢の中に漂っているように見える．」この混沌とした時代をそれぞれ表現したのがユイスマンス，ストリントベルク，ダヌンチオ，メーテルリンク，イブセン，ワイルドといった人々だった．この時期はロマン主義はすでに寿命を終え，象徴主義もすでにその歴史的使命を終えようとしていたし，自然主義も青息吐息の状態だった．僅かにベルクソンやアンリ・ド・ポアンカレらが旺盛な創造力を示してはいたものの，まだ新しい世紀の大立者となるべき芸術家達もその代表作を発表してその本領を発揮する段階には到達していなかったのである．

当時パリの文学界に君臨していたのはポール・ブールジェ，ピエール・ロチ，アナトール・フランス，モーリス・バレスの四人だった．また詩の世界はレニエ，モレアス，ベルハーランが人気を集めていた．だが今日では忘れられたというのは言い過ぎにしても，決して 20 世紀を代表する作家や詩人という評価を与えることはできないこうした登場人物達が当時としては大きな存在だったのである．

新しい世紀が始まったこの時期はすべてのものが，「○○前」か「○○後」だったと著者は述べている．つまりこの時期はロマン主義，象徴主義，自然主義といった固有の名前を付与されない個々の作家や作品がそれぞれ個別にそれぞれ活動していたのである．

当時の知的な若者達はこうした状況の中で自らの彷徨を繰り返しながら道を切り開いていったので，本書の主人公たるジャック・リビエールとアラン・フルニエの間で交換された膨大な書簡はそうした青春期の彷徨の典型的な姿を示しているのである．

ラクチュール氏によれば，こうした青年達が求めていたのは行動の指針ではなく，目印であり，師ではなく方法なのであった．ただそうは言っても方法とそれを体現した人物を截然と区別することは不可能であろう．こうした時代に終止符をうつべく発刊されたのがリビエールの生涯とは切り放すことのできない NRF だったのである．そして著者はこの雑誌がジイドを中心にした 6 人のグループからなる新たなプレイヤードの再現をめざしたことや，「詩法」の再現が目標にされた点に驚くべきではなく，真に驚くべきはこの雑誌がこれほど大きな成功をこれほどの長期間継続させることができた点に求めている．そして世紀初頭のこの闇夜にたいまつを掲げようと試みた数人のうちで，そのたいまつを掲げ，振り，あたりを照らしたのはジャック・リビエールだった．後年「あなたの師匠は誰ですか」というアンケートにたいし彼はデカルト，ラシーヌ，マリボー，アングル，セザンヌを挙げ，その理由として「彼らが闇を拒絶した人々だった」からだと答えている．

ところで本書の構成は三部からなり，それぞれ 10 章，7 章，8 章に分かれていて比較的きれいに三等分されている．最初はもちろん誕生から始まるのであるが，幼児期の生母との死別が心に残した傷に著者は注意を喚起している．そして父親との確執もまた後年の NRF 編集長の心に大きな陰を投げかけた．それが頂点に達したのはもちろん親友の妹との結婚問題をめぐってだった．父親の反対する理由はそれぞれが所属する階級の相違だった．有名な産婦人科医であり，ボルドー大学医学部の教授の息子と小学校教師の娘とでは不釣り合いだというのである．今日ではこのような違いはさほど問題にはならないであろうが，およそ 90 年近い昔においてはむしろ正常な反対だったであろう．著者は階級の相違という点を強調しているが，今日ではこうした事情はややわかりにくくなっているだけに適切な配慮であると考えられ

る．結局この父子は最後まで完全に和解することなく，先だった息子の死にも父親は立ち会わなかったのである（もっとも息子の死後になって彼は息子が自分が思っていた以上に大きな仕事をしたことを遅まきながら理解したようである）．

ジャック・リビエールは家庭的にはあまり恵まれなかったが，それを補ったのが母方の叔母達の存在だった．少年は度々彼女たちのもとを訪れたし，パリに出てからは頻繁に近況報告を書きおくったのだった．また弟や妹の存在もこの多感な少年にとりどれほど大きな救いであったかしれない．長男の彼は自ら脚本を書き，弟や妹にそれぞれ役を割り振って小劇団を編成した．著者がこうした点に後年の NRF の名編集者の萌芽をみているのは微笑ましい．

母の死が少年にとって第一の大きな事件であったとすれば，第二のそれは上級学校進学の準備をするため，パリ近郊のリセ・ラカナールに転校しそこでアンリ・フルニエと出会ったことである．二人の間で交換されたおびただしい数の手紙は今世紀の書簡文学の白眉であり，今世紀初頭の文学界のみならず，音楽，美術の世界をも含めた芸術界全体の動向を的確に捉えている点でも必要不可欠の資料となっている．

リセにおいてこのボルドー出身の少年はその頭脳の鋭さにより教師達の注目を引くにいたるのだが，なぜかエコル・ノルマルの入試には失敗してしまう．著者はこの点についてジャック・リビエールは学校に不向きだったのだ，という説明を与えている．なるほど彼は受験生としてばかりでなく，教員としても必ずしも成功を収めたとはいいがたいようである．

後年彼はクローデルの口利きでスタニスラス学院という海軍軍人養成学校に哲学教師として務めることになるが，学生たちの私語が多く，授業に耳を傾けてくれる学生は少なかった．彼はこの悩みを例えばアンドレ・ジイドに訴えている．結局彼の教師生活は長くは続かなかった．編集者としての仕事が軌道に乗った時点で退職したからである．やはり著者の言うとおり学校という場所に不向きだったのであろうか．だがたった一度失敗したからという理由で適性を云々するのはいささか不公平であろう．筆者は彼の赴任先が彼

の適性と合わなかったのではないかと考えている．血気盛んな軍人志望の少年達と哲学という組み合わせはいささかいわゆるミスマッチだったのではないであろうか．もちろんこのような問題は今日となっては論証しようのない問題であるが．

フルニエとの交友から彼は友人の妹とも知り合うようになり，数年後には結婚することになった経緯は上に述べたとおりである．だがこの結婚生活は必ずしも平穏無事なものではなかった．まず長女の出産が非常な難産だったため，帝王切開をしなければならず非常に大きな不安におそわれたこと．また NRF の仕事をするようになりその関係から雑誌の出版元のガリマールとも知り合い，さらにはその妻イヴォンヌとも交際するようになり，やがて互いに惹かれ合うようになっていった．二人の交友はいわゆる不倫とまでは深入りしないものであったと思われるが，それだけにかえって激しい感情の高まりを押さえることはなかなか困難だった．彼のそうした恋愛感情は彼の数少ない小説作品『エメ』や収容所で書かれた『カルネ』に吐露されているが，前者の草稿の一部がイザベルに発見されたことから彼のイヴォンヌに対する愛情が露見してしまったのである．

動転したイザベルは早速詰問の手紙を捕虜収容所の夫に出した．妻とイヴォンヌとの板挟みになったジャックが大いに悩んだことは当然だが，この三角関係には同じ雑誌の同人であるジャック・コポーも一枚かんで話はいよいよ紛糾した．コポーはフルニエの死後リビエールの一番の親友となった人物である．また彼はとりわけ演劇に関心が深く，NRF の編集長を辞めた後ヴィユー・コロンビエ座の支配人を務めた（二人の仲はコポーが演劇の世界に深入りするにつれてやや疎遠になっていったが，終生親友であり続けた．その間隙を埋めてくれたのが晩年のラモン・フェルナンデスとの交友である）．コポーは以前からガリマールの妻にあまりよい感じを持っていなかったこと，反対にイザベルには好意を抱いていたことがこの介入の原因だった．厄介なことにコポーとイザベルの間にもリビエールとイヴォンヌとの間と同様の関係が成立してしまったのである．

このあたりの記述には従来公にされていなかった資料がふんだんに用いられ読者の関心を大いに引くところである．これにはガリマール家およびリビエール夫妻の長男であるアラン・リビエール氏から提供された未公開書簡が大きく貢献している．こうした事実が明らかになったからといって，それが彼の文学の理解にとって本質的な問題であるとは思わない．だが同時に自分が関心を抱いている人物の様々な足跡を知りたいという欲求もまたかなり普遍的なものであろう．覗き見的な興味と言えば確かにその通りというほかないが，だからといって一概に否定できないだろう．だいたいにおいて本書はリビエールの文学を論じた書物と言うよりはむしろ人間リビエールを論じた書物といった方が適当だからである．

生計の問題もまた決して楽観を許さなかった．編集者としてのリビエールの収入は月千フランだった．ラクチュール氏の推定ではこれは現在のおよそ4,000フランにあたる．日本とフランスの物価の差を考慮しても10万円そこそこという額ではないだろうか．いかに切り詰めてもこれで一家の生計を営むのは非常に困難であろう．再刊されたNRFの編集長になったリビエールは社主であり親友でもあるガストン・ガリマールに窮状を訴え給料の倍増を要求し認められた．だがこれでも8,000フランにすぎず，二人の子供のいる家庭を維持することは決して容易ではなかった．当時のジャーナリスト達の給与と比較した場合この額は適切なものだったのだろうか．

1914年夏に第一次大戦が勃発し，ジャックも出征することになった（この大戦には義兄のアラン・フルニエも出征して戦死する．夫と兄を戦場におくったイザベルの心痛はもちろん大変なものだった）．ジャックはフルニエのような戦死は免れたものの緒戦で捕虜となって以後各地の収容所を転々として1918年に帰還する．夫が捕虜になったことを知らさせたイザベルは夫が残していった荷物の中に「生還しなかった場合に開封すべきこと」という包みを発見して開封し夫の恋愛について知ったのだった．その結果どのような事態が起こったかは上に見たとおりである．

捕虜収容所でのジャックは同じ捕虜仲間の信望も厚く，頼りにされる存在

であったのだが，ジャックの心は捕虜になりもはや故国のために働くことができない，という恥の意識に取り付かれていた．第一次大戦に対する彼の態度は決して右翼的な，という形容詞をつけるほど国粋主義的ではなかったけれども，この時点での彼はドイツとの戦いを決して悪とはとらえておらず，むしろ決着をつけるよい機会と喜んでいた節がある．この点では彼は戦争に対して否定的，ないしは懐疑的だった多くの知識人達とは態度を異にしていた．ラクチュール氏はジャック・リビエールほど明晰な頭脳を持っていた青年が戦争の持つ大きな悪を洞察できなかったのはなぜだったのか，理解に苦しむと述べている．

捕虜という立場を大いに恥じていた彼はある日一人の収容所仲間とともに脱走に成功する．だが残念なことにこの脱走劇はあと僅かのところで失敗に終わってしまい，収容所に連れ戻された彼は重営倉の罰を受けることになった．

ところでフルニエとの往復書簡では二人が読み，聞き，見た書物，音楽，絵画に関する感想が交換されるのだが，ほとんどすべての主要な芸術家の名前が登場するのにプルーストの名前が見いだされないことに，著者は不審をいだいている．なぜなら，『失われた時を求めて』はもちろんまだ公にされていなかったものの，『楽しみと日々』は彼らも読むことができたはずだからである．特にリビエールは後にプルーストを非常に高く評価するようになるのだから，このプルーストに関する沈黙は著者ならずとも不思議に思わざるを得ないところである．

もっともこのプルーストの評価に関しては後に NRF のジャック以外の同人達も評価のし損ないをしているのだから，若い二人の眼識のなさを責めるのはいささか酷というものかもしれない．雑誌の発行後何年かしてプルーストの方から NRF に対して『失われた時』の原稿が持ち込まれたのだが，NRF の側ではこれを拒絶してしまったのである．社主のガリマールは雑誌掲載に好意的だったのだが，同人達を代表して原稿を読んだアンリ・ゲオンの反対によって却下されたようである．後にアンドレ・ジイドはこの失敗を

プルーストに深く謝罪することになった．二人の青年に洞察力がなかったと言うよりは，プルーストがそれほど新しかったというべきであろう．

ジャックの精神史において大きな意義を持った人物のうち彼が実際に同時代人として生きたのはポール・クローデルとアンドレ・ジイドであろう．もちろんプルーストもまた大変大きな影響を与えることになるのだが，前述の二人は友人としての半面とともに，師としての半面をもあわせ持っていたという点において他の同時代人とは区別されるべきであろう．クローデルは文学上の関係において，というよりはむしろキリスト教への導きの（かなり強引な）師であるように思われるのにたいし，ジイドとの関係は逆に文学上の関係が優先しているように見受けられる．

信仰の問題は欧米の文学を考える場合我々日本人にとって扱いにくい問題であるが，事情はジャック・リビエールの場合も同様である．彼は当時の多くの青年達と同様，成長するにおよんで信仰から離れていった．後に彼が再び信仰に戻るのは，クローデルから強引な誘いがあったことも関係しているが，むしろイザベルの慫慂によるものと思われる．これは戦争に赴く前年の1913年のことである．収容所での自己と向かい合う時間の多い生活は彼を神と向かい合わせることになった．獄中で書かれた『カルネ』にはその思索が書き記されている．獄中でこれだけの量の思索をし，しかもその結果を書き留めたのは驚異的なことであるが，不思議なことに収容所暮らしの間のクローデルやジイドへの言及はわずか数回にしかすぎないことに著者は読者の注意を促している．

彼の信仰はイザベルの希望により再び始められたものだが，決してそれにより迷いからすっかり解放されたわけではなかった．すべてを理詰めで考える彼にふさわしく，宗教といっても実践ではなく，あくまでも思索の対象としてのキリスト教といった趣が深いのである．

だが収容所のおよそ3年間にわたる暮らしがすべて宗教色に染めあげられていたわけではない．思索の対象も少しずつ変わっていった．彼が残した『カルネ』は3年間で14冊であるが，釈放が近づくにつれて聖テレサ，聖

アウグスチヌスといった聖人の著作のほかにバルザックやジョセフ・ド・メーストルらの名前も登場する．また家族への言及とともにイヴォンヌに対する切々とした思いも記されている．

1940 年にフランスはナチス・ドイツに占領された．ナチスは被占領民であるフランス人に禁書目録を示した．それはユダヤ人作家フロイド，バンダ，モロアであり，共産主義者であるアラゴン，バルビュス，ニザンであり，反ファシスト派のマルロー，トーマス・マン，ハインリッヒ・マンらであったが，その中にジャック・リビエールの名前も含まれていた．リビエールの死後既に 15 年が経過し，彼の名前も忘れられかけていただけに，人々は彼の著作が禁書に含まれるのをいぶかしく思ったのである．彼はドイツ語が得意だったし，大学では哲学を専攻してカントやニーチェを勉強したのであり，またリビエール家の人々の常として音楽を好み，バッハ，ベートーベン，ワーグナーの音楽を好んで聴いたが，収容所暮らしにより，ドイツ人に対してそれ以前と同じ感情を維持することは困難になったのである．獄中で構想され戦後出版された『ドイツ人，一捕虜の回想と考察』というタイトルを持つ書物は決して偏狭な愛国主義によりドイツに対する憎しみをかきたてるといったものではなかったが，ドイツを少しでも批判したり，風刺の対象にしたものはナチスの目には許すべからざるものに映じたのである．

このドイツ論にはリビエール自身もドイツに対してやや不公平であったことを後に認め，対になったフランス論の執筆を企てた．死後出版された本書の執筆の契機になったのは，ラカナール時代の同窓生ジュール・ロマンの批判によるところが大きかった．『善意の人々』の作者に対する弁明の書簡で彼は憎しみを掻き立てるのが本意ではなかったが，一般的な風潮に妥協した面があったことを率直に認めた．この本は完成しなかったが，リビエールの死後『フランス人』というタイトルを付してイザベルにより刊行された．この中で彼はフランス人の長所と短所を厳しく指摘し，フランス人の使命を世界的な産業化から精神的な遺産を守るところに求めた．

1917 年になると彼はドイツからスイスへと移され，そこでしばらく滞在

した後翌 18 年にフランスに帰還したのであるが，ここへは妻子をはじめ友人知人たちの訪問も許され，また外出も許可された．彼は求められるままに，フランス現代文学講演会を何度も開いて好評を博した．イザベルが娘とともに訪れたのは当然であるが，その他ジャック・コポー，アンドレ・ジイドもやってきて，三年ぶりの再会を喜び合った．ポール・クローデルは当時南米ブラジルのリオデジャネイロに滞在中で彼を訪れることはできなかった．

リビエールの釈放前から NRF の再刊が旧メンバーの間では話題にのぼっていたが，それは大きな困難が予想された．というのは，同人達の間の対立が顕在化してきたからである．それはまず雑誌の発行元であるガストン・ガリマールと精神的な指導者であるアンドレ・ジイドとの主導権をめぐる対立である．ただしこの対立は思想的な根深いものではなかったようである．二人は間もなく和解するが，ジイドの側にはやはりいくらかのわだかまりが残ったかもしれない．そしてそのわだかまりはいくぶんかは新しい編集長のリビエールにたいするものでもあった．というのはジイドは NRF とは敵対的な立場にあったゴーロワ誌にリビエールが再刊された NRF に発表した宣言文を否定するようなエッセイを後年発表してリビエールの抗議を受けるという事態が起こったからである．ジイドはその実権を譲ってからも NRF は自分の雑誌であるという意識がどこかにあったのであろう．ジイドという人物の複雑さがうかがえるエピソードである．

いまひとつはシュランベルジェやアンリ・ゲオンとその他の同人達の政治的・思想的な対立だった．前者は戦争の勃発とともに愛国的傾向が非常に先鋭化し，新たな NRF はドイツに対してフランスの優位を鼓吹することをその主要な編集方針とすべきであると主張していた．そして文学以上に重要なものがあり，そうしたものを雑誌に多く載せるべきだと主張していたのである．後者はそれに対し，ドイツに対してはより寛大であったし，平和主義的傾向が強かった．また前者に比して文学重視の傾向を有していた．

再刊に伴う困難はそればかりではなかった．アンドレ・ジイドとならんで

リビエールの精神的な指導者だったポール・クローデルはジイドが『法皇庁の抜け穴』を書いて以来ジイドを快く思わないようになっていた．NRF 再刊に関するリビエール宛の書簡ではもしジイドが編集の主導権をとるのであれば，自分は執筆を拒絶すると書き送った．こうした困難はあったものの大戦の開始以来およそ 5 年後の 1919 年 6 月に NRF はなんとか新たな出発をすることができた．ゲオンやシュランベルジェらの反対を避けるため再刊の辞をリビエールが同人達の前に読み上げたのは既に原稿が印刷にまわされた後のことだった．これにはゲオンらから強硬な抗議がなされたが，ジイドがリビエールを全面的に支持したため，シュランベルジュやゲオンも新たな雑誌の編集方針を渋々認めざるを得なかったのである．（にもかかわらずジイドが後にこの宣言やその後の編集方針を否定するような内容の一文をライバル誌に掲載したことは先に見たとおりである．）

リビエールは国際連盟を通じての国際的な和平の実現という考えに共鳴していたが，まだ大戦の傷跡があちこちに残り，戦火を交えた相手国に対する敵意や，偏狭な愛国心が幅を利かせていた時代的背景を考慮すると彼の読みが時代に先駆けたものであったことが理解されよう．リビエールの死後シュランベルジュもその先見性を認めざるを得なかったのである．

1925 年にその早すぎた死をむかえるまでの彼の NRF 編集長としての業績については今更繰り返す必要はないであろう．20 世紀の前半に大きな仕事をなしたほとんどあらゆる作家を彼はその萌芽の状態においてその後の成長を見抜き，NRF へ執筆させたのだった．それはヴァレリー，ラルボー，シャルル・デュ・ボス，アルベール・チボーデ，アラン，バンジャマン・クレミュー，アンドレ・マルローといった人々ばかりではなかった．リビエールの死後 NRF の編集長として 1950 年まで編集長を務めることになるジャン・ポーランも仲間に加わり，かつてジャック・コポーのもとでのリビエールのように編集長の仕事を手伝うようになった．さらにはモンテルラン，ドリュ・ラ・ロシェル，ポール・モーラン，ポール・エリュアールらも執筆するようになった．シュール・レアリスムやダダイスムの作家達も例外ではな

かった.

彼は持ち前の寛大さからあらゆる才能のありそうな新進作家や詩人達に誌面を提供したのだが，作品の評価に関して作家の不興を買ったり（アラゴン，ブルトンの場合)，また逆に彼には珍しいことながら，アントナン・アルトーの場合のようにその評価を誤ったケースもあった．ただしアルトーには大きな関心を持ち続け，二人の間にはしばらくの間書簡の往復があった．これはリビエールの死後 2 年ほどしてガリマール社から出版された.

しかしダダイスムの作家達の作品は容易に NRF に発表されたわけではなかった．ジイドやリビエールが賛成だったのに対し，ゲオンやシュランベルジェは強い難色を示したからである．政治をめぐる対立は何とか切り抜けたものの，ことはそれぞれの文学観に関わるだけに問題はいっそう厄介だった．しかし政治的な対立の構図がそのまま文学評価の構図にもなっているところは興味深い事実である.

以上は内部的な対立であるが，それ以外にも NRF は外部からの攻撃にもさらされることになった．当時かなりの人気作家だったアンリ・ベローからの執拗な攻撃はリビエールを怒らせ，相手からの決闘の申し込みにうっかり乗ってしまうという騒ぎにまで発展した．もちろんこれは仲裁により行われずにすんだのだが，こうした右翼的傾向の強い作家やジャーナリズムからはリビエールの国際協調主義，新しい文学に対する開放的傾向は目の敵にされたことは容易に理解されよう．文学観，国家観の異なる集団を何とか説得して一つにまとめあげ，さらに外部からの激しい攻撃から集団を守ること，この困難な仕事を彼は結局最後まで続けることになったのである.

様々なものを許容する NRF のこうした態度は自国の作家達に対してばかり適用されたのではなかった．大戦開戦時には愛国青年だったジャック・リビエールはその捕虜生活でのドイツ人との接触から書かれたドイツ論にはドイツに対する批判的な言説が述べられているものの，彼は級友の批判により自らの過ちを認め，フランス論を書いて自国の欠点を指摘し，徐々にひろい国際協調主義に出ていったのである．そのような彼にとっては優れた才能で

ありさえすれば，国籍の如何は問題ではなかったのである．このようにしてサミュエル・バトラー，ジェームス・ジョイス，コンラッド，メレジスらをはじめとする外国人作家も紹介されたのだった．

リビエールの死はチフスによるものだった．家族が次々この病におかされ，その看病にあたっていた彼が最後に命を奪われることになった．彼は最初風邪を引いただけであると考え，弟の運転する車でドライブに出かけたりしたほどだった．だがその直後また熱が出てチフスであることが判明したが既に手遅れだった．1925 年 2 月 15 日に亡くなったときはまだ 39 歳の若さだった．死の翌日住まいからほど近いサン・ピエール・ド・モンルージュ教会で通夜がいとなまれた．スノンでの埋葬にはガストン・ガリマール，ジャック・コポー，ジャン・ポーラン，フランソワ・モーリャックが参列した．そして彼の亡骸は幼い日に別れた生母の傍らに葬られた．

わが国で文学，とりわけ外国文学が以前ほど読まれなくなってから久しい．もちろん一部のベストセラーは例外ではあるが，とりわけ古典は敬遠されているのが実状であろう．そうしたご時世であるからジャック・リビエールという名を知らないという読書人も多いことと思われる．本書は決して先鋭的な文学理論を振り回した難解な書物ではなく，当時の社会的，文学的な状況に目配りしながら，ジャック・リビエールを取りまく文学者達の動静に細かな注意を払いその生涯と業績を丹念に追求している．リビエールの人と業績に対する愛惜の情が伝わってくる好著であると思う．文学にはそれほど興味を持たない人でも 20 世紀の政治，社会，文化に関心を抱く人であれば大冊ではあるが，興味深く最後まで読み通すことのできる本である．本書が適訳を得て日本の多くの読書人にも迎えられることを期待したい．